がん薬物療法 (支持療法なども含む) 症例報告を除く

P-021

irAE 早期発見のための当薬局の取り組み



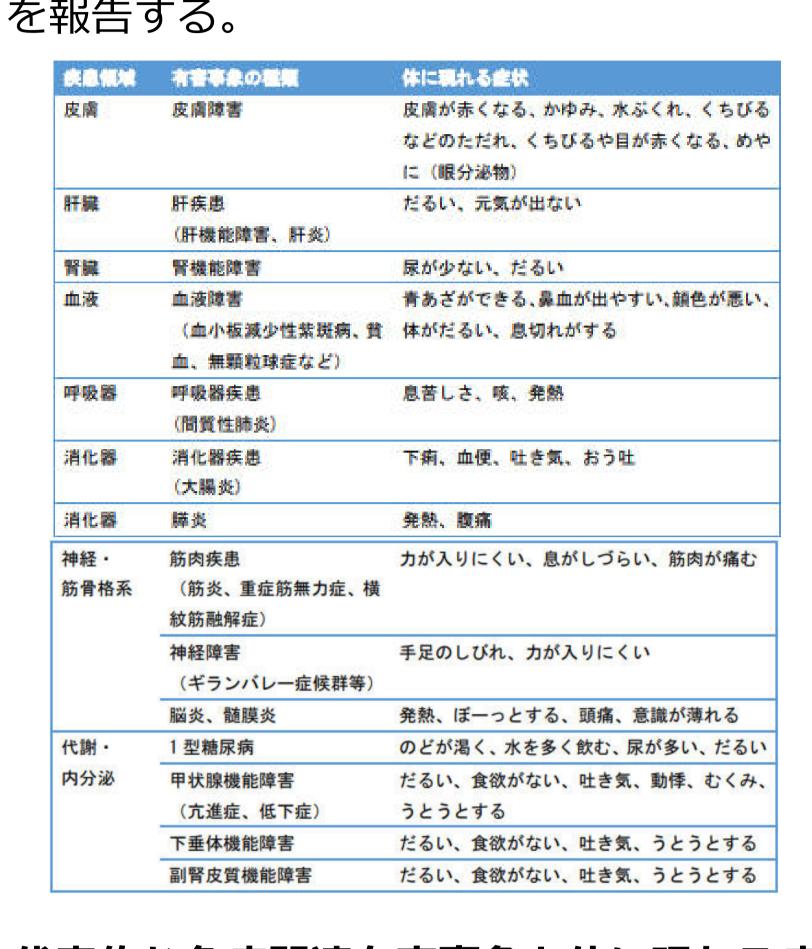
高木 正信 ^{1) 2)}, 上田 麻未 ⁴⁾, 佐藤 萌 ³⁾, 孫 世庚 ⁴⁾, 富田 真由 ³⁾, 赤嶺 美奈 ^{1) 2)}, 赤嶺 有希子 ²⁾, 田中 祥子 ^{1) 2)}, 加納 美知子 ^{1) 2)}, 久野木 良子 1)2), 堀 泰羽 1)2), 松尾 律子 1)2), 姜 恵元 1)2), 平野陽子¹⁾²⁾, 吉原澄吉⁵⁾, 谷田弘⁵⁾, 澤井一¹⁾

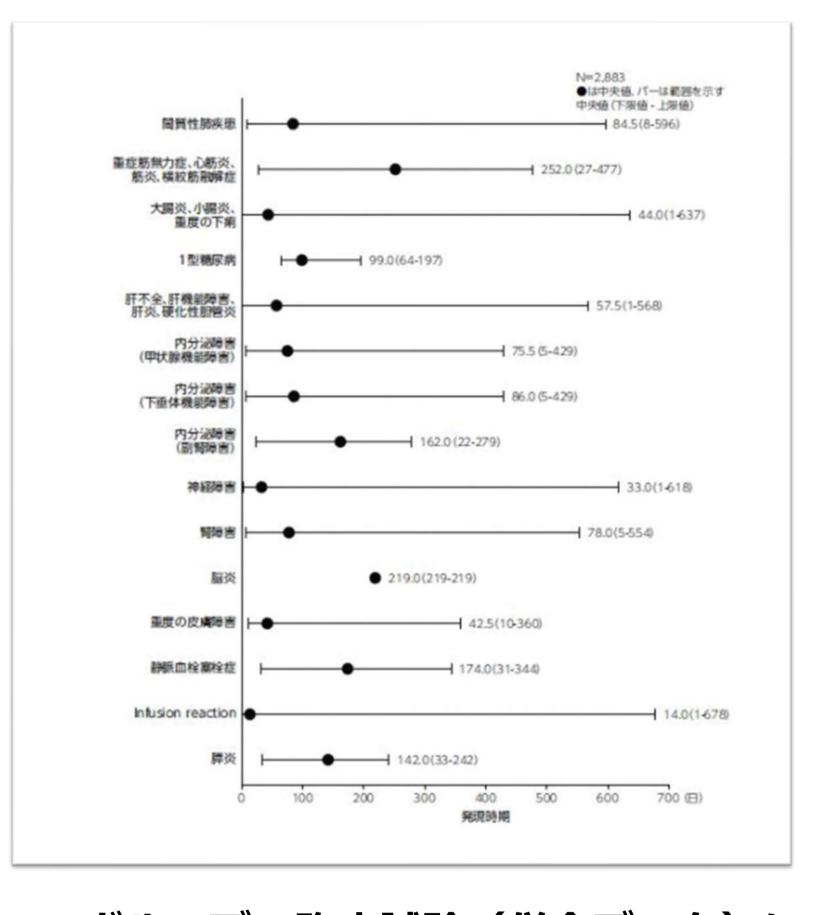


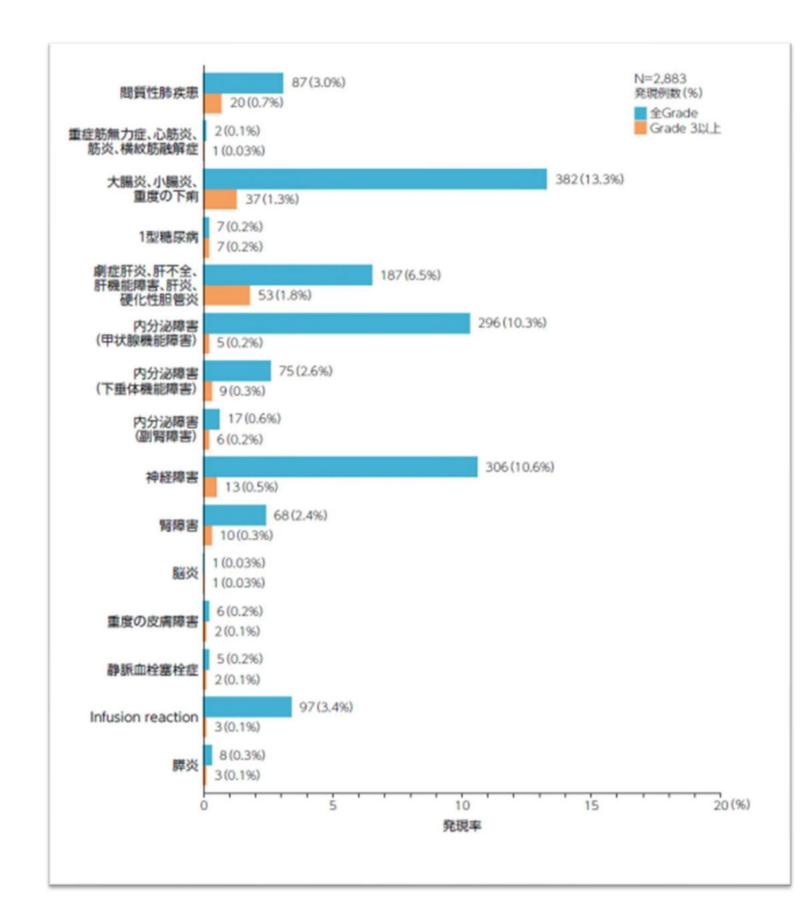
和同会薬局 湯島店 1),和同会薬局 駿河台店 2),昭和薬科大学 薬学部 3) 市京大学 薬学部 4), 一般財団法人 和同会 5)

目的

現在がん治療は入院から外来通院での治療に急速にシフトし、薬局薬剤師のがん患者に対する継続的なフォローが 求められている。 現在、日常臨床で免疫チェックポイント阻害剤(ICI)の適応が広がり、使用する診療科が増えてきた。 ICI ではこれまでの抗がん剤 では経験してこなかった irAE が起こる。いつどのタイミングで症状が現れるのか予測不明で、また投与中止後も生じる可能性もある。 しかし、その多くは可逆的で、コントロール可能である。 早期に発見することにより治療を中断することなく継続することができる。 ICI の効果を発揮させるためには、かかりつけ薬局での副作用マネジメントが重要である。今回、irAE を早期発見、早期治療するため 薬剤師がトレーシ ングレポートにて医師へ情報提供することや、患者のモニタリングの重要ポイントなどまとめた当薬局の取り組み







代表的な免疫関連有害事象と体に現れる症状

ニボルマブの臨床試験(併合データ)に おける主な irAE の発症時期

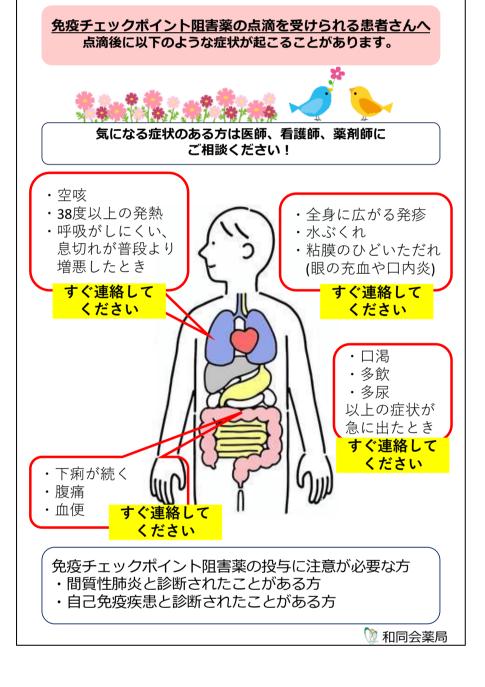
ニボルマブの臨床試験(併合データ) における主な irAE の発現割合

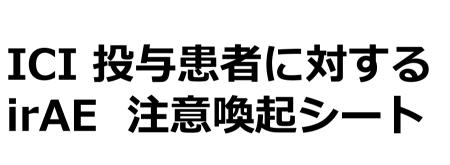
厚生労働省 免疫チェックポイント阻害薬による 免疫関連有害事象対策マニュアル.2022 tp1122-1q05.pdf (mhlw.go.jp)

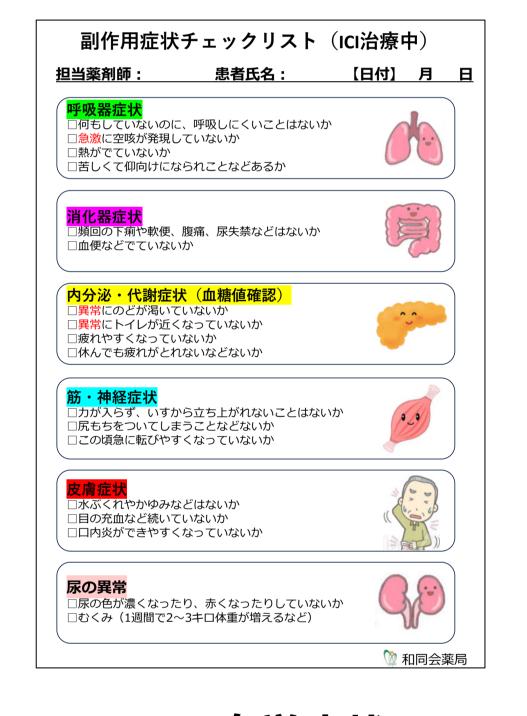
方法

当薬局では、ICI投与継続・中断を含め17 人の 患者が来局している。 ICI の患者に対して、irAE 早期発見のために薬局全体取り組み始めた。

- 1,患者に副作用モニタリングするためのチェックシートを作成し、薬剤師間で情報共有できるようする。
- 2, ICI を受けている患者の情報を医師に伝えるため副作用の重要なポイント項目をまとめる。







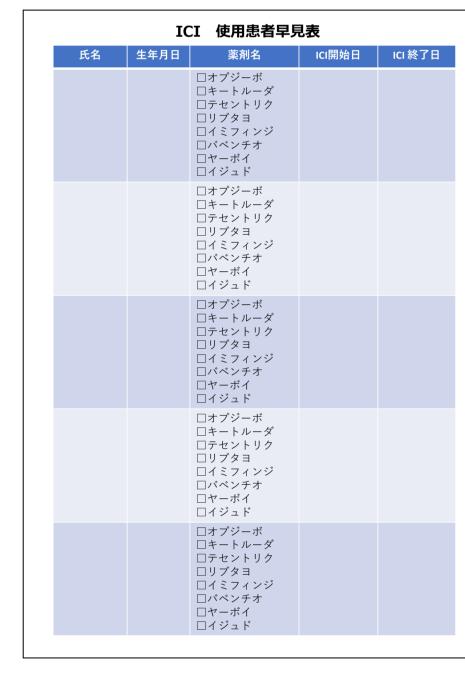
irAE 自覚症状 チェックリスト



ICI 投与患者に対する 血液検査値確認リスト



薬局内共有シート



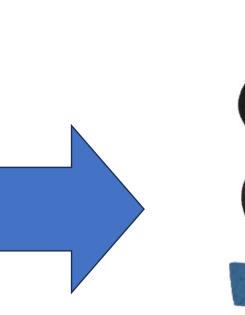
ICI 使用患者薬局内 確認早見表

結果

薬剤師が同じチェックシートを用いることで、薬剤師間で共通の認識をもち患者の irAE のモニタリングをすること ができる。また、 モニタリングした情報を薬剤師間で精査し、患者本人や家族に説明することができる。トレーシ ングレポートも重要項目を網羅するこ とにより医師に正確な情報を提供することができる。



チェックシートにて モニタリング



定期的に薬局内で情報共有・ 問題提議を行うことによって 薬剤師の意識改革がおこった。

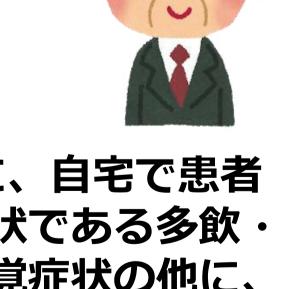


副作用を見逃さないぞ!!

【当薬局での実例】







irAE 早期発見のために、自宅で患者 さんご自身が高血糖症状である多飲・ 多尿・口渇といった自覚症状の他に、 簡単に確認することができる尿糖検査 試験紙を患者に配ることで注意喚起を 促した。

考察

当薬局が作成したチェックシートを用いることで患者の症状を細かくモニタリングでき、irAEの早期発見につながることが示唆された。 また、モニタリングした情報を、薬剤師間、患者本人、患者の家族と共有することでより具体的な症状が把握できる。また正確な情報 を医師に提供することによりその後の治療方針を決める手助けになると考えられる。

irAE は治療終了後も起きる可能性があるため、定期的かつ継続的な患者の副作用モニタリングが必要となる。ICI 関連副作用と疑われる 症状が確認できれば、直ちに主治医に情報提供ができるように irAE の初期症状について知識を深める必要がある。

ICI を病院で行っている患者は、服薬指導時に病院から交付された ICI 副作用評価ラベル確認、患者からの聴取により確認することが重 要である。薬剤師としてのスキルアップしていくことが 患者が安心して、安全に薬物治療を継続していくことにつながると考えられる。





